
正しい平和の壊し方 ~ Just a Breaker or Crazy Brave? ~

江角 稚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

正しい平和の壊し方 } Just a Breaker or
Crazy Brave? }

【Nコード】

N6184Z

【作者名】

江角 稚

【あらすじ】

起承転結の”転”に当たる部分です。

”作り方”、”守り方”に続く急転直下をお楽しみ下さい。

（前書き）

愛着が湧いて来たので、二人の勇者様に名前が付きました。

名付け親？

．．勿論、私、江角です。

ある日の昼、勇者様のお二人は図書館で鉢合わせました。

「ちょっと、話をしないか？」

「激しく同意。勇者様のお誘いとあらば」

彼は世界に平和をもたらした時と同じように、答えました。

「カイル。…お前、その台詞好きだな…」

「激しく同意」

二人は笑いました。

司書に睨まれるまでは。

静けさ溢れる図書館では、騒ぐことはおろか、大事な話も出来ません。

二人は外に出ました。

「…で？どうかしたのか」

激しく同意、以外の台詞で彼は問います。
そうでないと、会話は成立しませんから。

「いや…平和になって、良かったな、と」

勇者様は、勇者様ならぬ口調ではのぼのと言いました。

「争ってたら、今頃魔王退治だよ」

「そうだな。良かったと思うよ、俺も」
もう一人の勇者様も答えます。

「それなら、俺は今頃殺人鬼かもな」

「そっちの魔王も酷いな。」人間共を殺せ”だっけ？」

「ああ。でも…平和になって、良かった」

先程カイルと呼ばれた勇者様は、笑顔で答えます。

「激しく同意」勇者様は相手の台詞を奪い、

「それは俺の台詞だ」もう一人の勇者様は、相手を窘めたしなました。

一息ついて、勇者様はぼつりと呟きます。

「でも…犯罪は減らないな。俺が魔王を倒さなかったせいではないけど」

「そうだなあ。こればかりは、仕方ない。住民も魔物も、心に悪を持った者同士だから」

彼等は苦笑いをします。

「その通り、だな」

「…そう言えば、この前殴り合いがあっただって聞いたな。平和になったはずなのに、まだまだ物騒な時代だ」

「こんな世界を、俺達は必死で守ってたんだな」

「こうなることを、俺達は本気で望んでいたのかな…?」

「だからこそ、心の悪は憎むべきなんだ」

不意に、彼は言いました。

「どうしたんだよ? 急に」

カイルには、訳が分かりません。

彼が、ムキになる訳が。

そして、勇者様は続けます。

少しずつ、カイルを外に誘ってまで話しかかった本題に、会話を近付けて行こうとします。

「この前、魔物の女と結婚するって、言っただろ」

「言われたね」

「その女、人間からも好かれてるって、言っただろ」

「言われたね」

「それで、決着付ける、って言っただろ」

「…言われたね」

何だか、嫌な予感がしました。

「その…殴り合いって、多分、俺達のことだ」

「……」

何も、言い返せませんでした。

”激しく同意”と言う、彼独特の口癖すらも出ませんでした。

僅かな沈黙が、二人の間を流れ。

意を決したように、彼は口を開きました。

「実はな…俺、」

返答に詰まります。

一体、どうしたのでしょうか？

「…俺、勇者を首になっちゃって」

「…え？」

彼は驚きを、口にしました。

「魔王も殺せず、拳げ句に魔物の女を人間と奪い合う勇者なんて、勇者じゃない”ってさ。王に、首にされたよ”

「お前…」

「馬鹿だろ？笑ってくれよ」

勇者様は、疲れ切った微笑みで言いました。

「だから、俺のことは…もう、”勇者様”じゃなくて”ザイル”って呼んでくれよ」

「嫌だよ、ややこしい。お前は”勇者様”で、俺は”カイル”だ」

「ややこしいって…一文字、違うじゃないか」

「それには、激しく同意」

久々に、彼の口癖が出ました。

「あーあ、勇者を首になるなんて…これじゃ二トだよ」

「それなら、俺だって。魔王の手によって、無理矢理”勇者”の地位に立たされて人間排除をさせられそうになった、ハリボテ勇者さ」

「大体さ…魔物って、どうして出来たんだろ」

ザイルと言う、勇者様を首になった男は言い、

「心を邪惡に染めた人間が、禁術に手を伸ばした反作用で」

カイルと言う、勇者様もどきの男も言いました。

「…それはお伽話だろ」

「同時に、史実でもある」

「世の中に不思議なものは多い。しかし、不思議がっている人間の方がもっと不思議だ…」

「そうだな。人間自体が、魔物に最も近いと言うのに。世界って、まだまだ不可思議なことだらけだよ」

そう言って、カイルは太陽に手を翳す。

手の平が、赤黒く妖しく光る。

「お前、まさか…」

ザイルは驚いて、彼を見ます。

「俺は…魔物と人間の混血^{ハイフ}だよ。血の色が、赤と黒の中間だろ」

カイルは翳した手を、彼に見せます。

「魔物だった俺の母さんは昔、人間の男に犯されたんだ。そいつが、俺の父親に当たる人だ。…これじゃ、どっちが魔物で人間だか、分かりやしない」

彼は言い終えてから、啞然としているザイルに向かって何か取り繕うとしました。

あまりにも、彼が何も言えずに固まってしまったから。

「な、なーんてな。冗談だよ」

顔は笑っていましたが、その瞳は笑ってなどいませんでした。本当なのだと、訴えていました。

「俺は、さ」ザイルは言葉を紡ぎ始めました。

「勇者を首にされてから、ずっと考えてたんだ」

「…何を？」

カイルが問います。

彼は、意を決して答えました。

「こんな腐り切った世界、滅べば良いとすら思えるんだ」

「世界を、滅ぼす？」

カイルは思わず、聞き返します。

「ああ。　この世界に生きるもの全てが、死ねば良いと思ってる」

何も、言わない。

何も、言えない。

それなのに、心の奥底で

” 激しく同意 ”

と叫ぶ、カイル自身の声が聞こえた　　気がしました。

（後書き）

．．話自体が転んだ訳ではありません。
あくまで、起承”転”結の”転”であり、急”転”直下の”転”で
す。

．．受験生が転んだ転んだ言うなんて．．。
同じ年の方々、すみません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6184z/>

正しい平和の壊し方 ~ Just a Breaker or Crazy Brave? ~

2011年12月20日19時51分発行